

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04544

研究課題名(和文) 森有礼文部大臣時代の教育政策に関する総合的研究 「森文政」期像の再構築

研究課題名(英文) The Comprehensive Research on Education Policy under Minister Mori Arinori

研究代表者

田中 智子 (TANAKA, Tomoko)

京都大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：00379041

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：森有礼文相の下で教育政策が展開したいわゆる「森文政」期を、「天皇制/国家主義的教育体制の確立期」と捉える史観は過去のものとなりつつあるが、その性格をいかに再定義するか、いまだ確たる見解が存在しない。

帝国大学史研究、徳育・教育勅語制定史研究など、別個に進展してきた研究史を総合的に俯瞰し、森文政期の再検討を図った。特に中等教育行政とその実態に焦点をあて、森自身の行動と思想にも考察を加えた。大久保利謙編『森有礼全集』(1972)を超える史料の開拓を重視し、(1)当該期の府県下中等教育(2)在米女子留学生にみる森のキリスト教観(3)森の「不敬」行為と暗殺死(4)後世の森像形成過程、を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高等学校の日本史教科書においてはおしなべて、「文部大臣森有礼による学校令公布」により学校制度が「体系的」なものとして「整備」され「安定」した、そして同時に教育は「国家主義重視の方向」を強めた、と叙述される。本研究は、森文政の制度的な未完成さや流動性の強さ、森と彼を取りまく人々・社会にみる「国家主義」の内実の複雑さを具体的に示すことで、従来の教育史における森有礼・森文政期像の再検討を図った学術的研究であるが、同時に教育現場へのメッセージとなりうるものである。

研究成果の概要(英文)：The simple view which regards the so-called "Mori Period" when education policy was developed under Minister of Education Mori Arinori as "establishment period of an Imperial or a nationalistic educational organization" is being something in the past, but a certain view doesn't exist in how to define its character yet.

The overall "Mori Period" is to be reconsidered. It is realized by overlooking historical study about Imperial University and about moral education or the Imperial Rescript on Education, both of them have developed independently. Pioneering of historical records beyond the Okubo Toshiaki ed. "Mori Arinori Complete Series"(1972) is also necessary. The points which became clear are belows; (1) formative process of secondary education under some prefectures, (2) Mori's thought on Christianity and the Japanese girl studying abroad in America, (3) Minister Mori's "irreverent" and assassination mortality, (4) Mori's posterior image.

研究分野：教育史学

キーワード：森有礼 学校令 同志社 中学校

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 「森文政」期研究の現状

文部大臣森有礼の下で教育政策が繰り広げられたいわゆる「森文政」期を、「天皇制(国家主義的)教育体制の確立期」と捉える単純な史観は過去のものとなりつつあるが、その性格をいかに捉えるかとなると、いまだ確たる見解が存在しない。

この問題を考える上で注目すべきは、中野実と佐藤秀夫によって行われた問題提起である。前者は帝国大学史研究という立場から、組織内部の文書と関係者の個人文書を活用し、森の「思想」分析と切り離れた制度研究を目指した(『近代日本大学制度の成立』)。後者は徳育・教育勅語制定史研究の立場から、「近代天皇制教育体制の基盤を作り出した張本人が森」であるとする従来の研究を批判し、森の暗殺死により「『教育の明治維新』の劇的な終結」がもたらされたと評した。

### (2) 申請者の研究

申請者は、高等中学校研究および私立学校史研究(同志社史)の立場から、間接的に森文政期を取り上げてきた。ともに、帝国大学史や勅語制定史のような「中央」の視点ではなく、「地域」からの視点を重視する研究である。中学校令にはじまる五月雨式の法令・省令・告示の公布により、各地の反応を見ながら「走りながら決める」森の下での政策は、中央集権的とは言い難い「柔軟さ」と「あいまいさ」を有したことを明らかにした。また、同志社史を教育運動史として捉え、地域の支援実態や全国的な広がりを描き、森をはじめとする中央官僚や財界人の支持を得ていた側面も強調した。一方、森の下で編纂された倫理科用教科書『倫理書』について、寄木細工的で破綻した書物であるとの評価を下し、これをまとめた意図をもつ書物と捉える研究を批判してきた。

## 2. 研究の目的

本研究は、帝国大学史研究、あるいは徳育・教育勅語制定史研究などにおいて別々に展開してきた森文政関連の研究を、自身のこれまでの研究も含めて俯瞰した上で、大臣森自身の下での教育政策、ならびに森個人の思想の双方に目配りし、森文政期の教育史上の再定義を目指すものである。思想研究を批判して制度研究を実践しようとした中野も、思想史の方向から森を天皇制教育の確立者とすることを否定した佐藤も、では森文政期の特質とは何か、その前後と何がどう異なったのかという評価を提示することなく没した。当該期の森個人についていえば、目下、管見の限り、森は勅語段階とは異なる国家主義者、ある種欧米立憲君主主義的な国家主義者という落としどころに帰着していく議論が多い。その代表が、森を「機能主義的国家主義者」と定義した園田英弘である(『西洋化の構造』)。近代天皇制教育体制の権化が森ではないと言いつつも、かたや儀式の成立に着目して、「森文政期における独特な国家主義思想に立つ天皇制的教育」「本格的な近現代天皇制教育は森文政期に発足した」との評価を示した佐藤は、いわば園田と同様の立ち位置にあったと解釈できる。

本研究は、特に中等レベルの教育行政と実態を踏まえ、森自身の考え方についても再検討した上で、森文政期の再考を試みる。森文政に関する包括的研究としては、海後宗臣の下での共同研究「森有礼の思想と教育政策」(『東京大学教育学部紀要』第8巻、1965年)が半世紀を経てなお生命力を保ち、これを乗り越える全体像はいまだ打ち出されていない。本研究を通じて、研究史に一石を投じることを目指す。

## 3. 研究の方法

1972年に大久保利謙が編集刊行した『森有礼全集』は、新修版以降も、森研究の基本史料とみなされてきた。しかし、新聞雑誌記事や各学校の文書など、『全集』において渉猟されていない

い種類の学事関係史料が幅広く想定される。本研究では、『全集』を超える史料の開拓を重視し、具体的には以下の諸点を集中的に突き詰める。

一点目に、地方の行政文書や紙誌（新聞、学事年報等）の精査である。森は文部官僚・大臣として巡視を重視したため、地方レベルにおいて、その巡視過程や思想・評判を明らかにできるものと見込まれる。

二点目に、私学関係史料の収集である。従来の森文政研究は「帝国大学」研究が中心であり、私学政策という観点から捉える姿勢が弱かった。森や文部省（文部官僚）と私学との間に交わられた要求や対応が明らかになれば、あらたな森文政の一側面を描き出せるはずである。

三点目に、二点目に関するミッション系学校の史料検索とも重なる部分があるが、来日宣教師関係文書など、キリスト教に関わる史料群のなかに、森にかかわる各種の記載を発見していくことである。これらを通じ、森の宗教的なスタンスについて考察の糸口をみつける。

最後に、史料の探索範囲を国外に広げることである。1870年代初頭までの森の留学期・在外公館勤務時代にとらわれず、文相時代についても、特に留学生政策という観点から史料所在の可能性を探る。

#### 4．研究成果

##### （1）森文政下の府県下中等教育

中学校令に定められた尋常中学校設置に至るまでの府県の中学校形成過程を、富山県・石川県という北陸の二県にそくして明らかにするなかで、森および森文政の特質について考察した。まず、第三地方部学事巡視の一環として、1887年10月～11月に県下諸学校を訪れた森の指示によって、富山県下での体操教育・英語教育の改革がはかられた点を指摘した。また石川県では1887年10月の第四高等中学校設立の後、仏教系の共立尋常中学校が誕生し、キリスト教系の仙台・東華学校と同様、府県管理中学校とも異なる「半県半民」的学校として、県と宗教勢力の協同体制の下に運営されていた実態を跡付けた。

##### （2）在米女子留学生とキリスト教の問題

若き日の森有礼が初代在米弁務使として、現地の日本人留学生と積極的に交わり教育に努めたことはよく知られているが、文相時代の彼が留学生政策をどのように進めようとしたのかという点については未解明であった。E・モースゆかりの、ボストン郊外セーラムで発行されていた地方紙、*The Salem Gazette* の1886年3月記事によれば、日本人女子留学生の一人としてセーラム師範学校に学び、その後、ボストン界隈で幼児教育についても知見を深めた加藤錦について、文相森は、ピューリタンのキリスト教に縛られることなく、自由な選択が可能な宗教環境を与えようとしていた。また、彼女の寄留・就学先決定には、キリスト教に対抗的な立場をとるフェノロサが関わっていた。モースとフェノロサという、反キリスト教的な帝国大学お雇い外国人の人脈については従来から知られるが、森との関係は考慮外にあった。加藤をめぐる経緯は、森がキリスト教への単純なシンパの立場にはなかったことを示唆する。

##### （3）森文相の「不敬」行為と暗殺死

森の「不敬」と暗殺死をめぐる事実関係の確定と一連の報道の分析を試みた。森にかかわる新聞雑誌記事の収集という目的を兼ね、思想的な森の位置を考える作業として行った。

1887年11月の森の伊勢神宮参拝当時には特段の報道はなく、三宅雪嶺の『日本人』が翌年になって、「風教大臣」の「不敬」との噂があるとして事件を拡大し、文相としての森の欠点の指摘も加えて、森批判の風潮を作り上げた。事件後の政府は、公的な説明・見解を示すことはせず、暗殺者の称揚や森の「不敬」を広めるような活動や言論を抑制し、暗殺者故殺の可能性は「文明」の立場から封殺した。そして、帝国大学に存在した森への不満の解消や、森のイメージアップに

尽力した。かたや一部の報道において、森をキリスト教徒とみなし、神道信仰に熱心な暗殺者との宗教的対立ゆえの死、と位置付ける論調が、「内村鑑三不敬事件」や「宗教と教育の衝突」に先立って形成されていたことを指摘した。

#### (4) 森有礼像の形成をめぐって

森の死の直後に、徳富蘇峰が「あたかも二人の森がいるよう」と評して以来、前半生の「啓蒙主義・自由主義者」的な森像と、後半生の「国家主義的」森像の分裂が言われたこと、井上毅が森の「名誉復権」を期し、天皇制教育を目指した「国体教育の主義」をもつ森像を作り上げる役割を果たしたことが知られてきた。本研究では、戦間期以降の森像の形成過程に注目し、1926年に日米友好の観点から森がクローズアップされたこと(C・ランマン *The Japanese in America* の復刊と、森の肖像の巻頭掲載)、1938年に薩藩史研究会により森没後五十年追悼講演会が開かれ史料収集が本格化したこと、1944年に大久保利謙が『森有礼伝』を刊行したこと、1972年に大久保編『森有礼全集』が完成したこと、の諸点を画期として析出した。の副産物としての は、徳富の「二人の森」説を批判し、森の思想は最初から国家本位であったと位置づけたが、同時に、森の実証研究の礎となり、教育行政家という枠組みで森を語る発想を定着させた。は、徳富的なる視点の復権を伴ってまとめられたが、同時に 以来の成果の結実であって、明治文化研究会に所属した尾佐竹猛の影響が強く認められること、を指摘した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田中智子	4. 巻 0
2. 論文標題 19世紀後半における来日カナダ・メソジスト教会宣教師の活動 教育事業を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際学術研究会 全球化視域下の近代東亜社会転型 会議論文集	6. 最初と最後の頁 97-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中智子	4. 巻 なし
2. 論文標題 森有礼「不敬」・暗殺事件顛末 虚実の報道を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 高木博志編『近代天皇制と社会』（思文閣出版）	6. 最初と最後の頁 345-377
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中智子	4. 巻 府県別編
2. 論文標題 富山県の中学校形成史	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神辺靖光・米田俊彦編『明治前期中学校形成史』北陸東海	6. 最初と最後の頁 97-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中智子	4. 巻 府県別編
2. 論文標題 石川県の中学校形成史	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神辺靖光・米田俊彦編『明治前期中学校形成史』北陸東海	6. 最初と最後の頁 133-229
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中智子	4. 巻 66
2. 論文標題 同志社大学設立支援の現実 誰がいかほどの寄付をなしたか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 キリスト教社会問題研究	6. 最初と最後の頁 1-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 田中智子
2. 発表標題 19世紀後半における来日カナダ・メソジスト教会宣教師の活動 教育事業を中心に
3. 学会等名 国際学術研討会 全球化視域下の近代東亜社会転型 於：上海大学 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

同志社大学人文科学研究所編『新島襄英文来簡集』(木立の文庫、2020年)の翻刻・編集にあたった。
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考